



Y K K

読もう書こう考えよう

みなさんこんにちは、図書館担当の伊丸岡です。水無月(みなづき)を迎えました。1年生の図書館オリエンテーションも無事全クラス終了。試験が終わったらまた、たくさん読書してくださいね。



6月19日 桜桃忌

桜桃とは何ぞや?サクランボのことなり。辞書には「桜ん坊」などという表記も見える。さて、1948(昭和23)年のこの日、小説家・太宰治の遺体が、東京・玉川上水で発見された日です。奇しくも太宰の誕生日でもあった。そして太宰の晩年の作品『桜桃』にちなんで、この日を「桜桃忌」と名付けられた。サクランボの花もかわいらしく、きれいだね。

6月10日 時の記念日

世の中には「〇〇の日」という記念日がわんさか存在するんだけど、「時の記念日」は古い。671年4月25日、天智天皇の時に初めて水時計で時を知らせたという日本書紀の故事にちなんで、1920(大正9)年から、これを太陽暦に直した6月10日を記念日とすることにしたというもの。今年で102年にもなるんだね。

時間を守ろう。締切を厳守しよう。信用の第一歩。社会生活の第一歩。

6月23日 沖縄慰霊の日

1945年6月23日、沖縄戦終結の日とされています。77年前、命がけて逃げ惑った沖縄の人たちに、ウクライナの避難民が重なります。一度は沖縄へ、平和を訪ねる旅に行ってみることをお勧めします。

6月のうた

左記の詩は、これまでもあちこちで紹介してきたのだけれど、ボクが高校1年の時の「現国」(現代国語=当時)の先生が授業で紹介してくれた詩を、ノートの端っこに書き留めておいたものです。後年、芥川全集で確かめてみると、芥川はたくさんの詩や短歌なども残していることがわかりました。

そんなこともあって、一昨年新しくした家の庭にシンボルツリーとして「沙羅」の木を植えてみたんだけど、残念ながらまだ美しい花は目にしていません。ことしは少しは咲きそうな予感がしていますが。

毎年6月になるとこの詩を思い出し、芥川の小説を数編読んでいます。みなさんもぜひこの機会に、芥川龍之介、読んでみませんか?

『芥川龍之介全集 全8巻』 筑摩書房 (個人全集の棚)

…なんと60年前の1962年に出版された本でした(ルビは豊富!)

図書館の進化

『耳をすませば』 柀あおい 徳間アニメ絵本 (絵本の棚)



ジブリ映画の名作『耳をすませば』の原作にして、映画のシーンがふんだんに配された大型本。癒やされます。

月島雫は、読書が大好きな中学3年生の女の子。ある日、雫は図書館の本の貸出カードにいつも同じ少年の名前があることに気づき…?(日本児童図書出版協会)

昔は、本の裏表紙の見返しに、「帯出カード」なるものがさしはさまれていて、借りるときにはこのカードに学生番号や氏名を記入して、カウンター担当者に差し出して本を借りました。したがって、このカードを見れば、何という人が借りたのか、何人に借りられたのかが一目瞭然でした。

しかし、平成になって学校図書館でもコンピュータ化が進み、本にはバーコードラベルが貼り付けられ、カウンターではバーコードリーダーで貸出・返却の処理が瞬時にできるようになりました。それまでの蔵書管理は、「書名索引カード」と「著者名索引カード」の2種類の検索カードが用意されていて、それを利用者が1枚1枚めくって探したものです。また、蔵書台帳も手書きでした。平成になってからコンピュータ管理に移行した頃の作業はさぞ大変だったことだろうと推察されます。

ボクが学生の頃、大学の図書館はまだ手書きカードでの貸出方式でしたが、アルバイト先の某市立図書館ではすでにバーコード読み取り式の貸出・返却でした。ただ、読み取り機がペンタイプのもので、性能がよからず、読み取りに苦労しました。日本一小さい(市域が)市でしたが、先進的な公共図書館で、しかも歩いて行ける範囲に分館を配置するという、図書館の充実したまちでした。

そういうわけで、『耳をすませば』の月島雫が天沢聖司の読んでいる本を「スーター」していくようなことが、昔は可能でした。だから物語にもなるのですが。

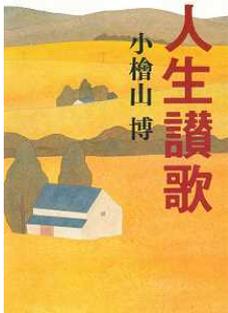
しかし、図書館には「図書館の自由に関する宣言」という図書館の憲法みたいなのがあって、なんびとも個人の読書記録や読書傾向をたどったり他者に漏らすことは禁じられているのです。図書館以外の公的機関から問い合わせがあっても、その情報を外部に漏らしてはいけないことになっています。

なお、有川浩(ありかわ・ひろ)原作の『図書館戦争』は、岡田准一が主演で映画にもなっていますが、この「図書館の自由に関する宣言」が物語の柱になっています。

『図書館戦争』 有川浩 アスキー・メディアワークス (五十音順作家別単行本の棚)

図書館は宝の山

『人生讃歌』 小檜山博 河出文庫



今年度1号で小檜山博氏を紹介しました。その後、自分で買い求めた『人生讃歌』を読み終えました。鉄道会社の車内広報誌に連載されたエッセイを集めたもので、内容が重複する話も多いのですが、じんと胸を打たれる話が多い。

貧農の家に生まれ、苦労した子ども時代、不仲で厳しかった両親、札幌まで列車で13時間もかかって行った中学の修学旅行の話、高校の寄宿舎時代の話、人から聞いた他人の苦労話。どれも心洗われるような気がしました。たまにこういう話を読んで、汚れた心を洗わないと、と思います。大きく異なる時代の話ですが、こんな苦労をした人がまだその辺りにたくさんいるんだなあ、と思います。

戦時中、農家のハルさんは夫と息子を戦争に取られている間、新潟から援農にやってきた中学生を半年住ませた。その子が50年経ってハルさんに再会にやって来たという話は感動しました。

作者は、山奥で育ったにもかかわらず、いまなお魚が大好きだという。春ニシンに始まり、サンマ、ハタハタ、紅鮭と年中魚は欠かさない。しかも朝昼晩と。そのかわり、ほかの一切の贅沢はしないという。ボクは子ども時代、三食魚だったからか、いまはあんまり魚は好きではない。いや、親父が好物だったからボクは好きでなくなったのかもしれない。旭川に来た当初、こんな内陸なのにどうしてこんなに魚が好きな人が多いのかと不思議に思ったものでした。

小檜山さんの両親は、福島から来て最初は炭焼き、のち開拓農家、相当な苦労をしたそうです。

ボクの祖父も津軽からやってきて最初は厚沢部の方で炭焼きをしていたらしい。父のすぐ上の兄(伯父)までは津軽生まれ。理由は定かではないのだが、当初永山村に入植しようとしてきたらしいのだが、あまりの雪の多さに断念し、妹だかが嫁いでいた留萌の方を頼っていき、住み着いたものらしい。

小檜山さんはボクの父親とほぼ同年代の方。父は好きではなかったが、小檜山さんには親近感を持ちます。

小檜山さんの小説はまだ読んでいません。せっかく『小檜山博全集』があるのだから、少しずつ借りて読んでみようかな、と思う次第。図書館はいろんな人生、時代、技術、知識、芸術、癒やし、ファンタジー、娯楽、ことばの詰まった、宝の山だ。

人生讃歌。ボクの人生は酸化してて錆びています。

『太郎物語 高校編/大学編』 曾野綾子 新潮文庫

(文庫「その」の棚)



またこれか。「曾野綾子」で蔵書検索したら7冊。しかもお目当ての『太郎物語』がない。そんなわけないだろうと思って文庫の棚を見てみると、本はある。今度は「太郎物語」で蔵書検索してみると、ちゃんと出てくる。んんん？どんなわけだ？

じいっと目を凝らしてみると、なんと、「曾野綾子」で7冊、「曾野綾子」で『太郎物語』を含む12冊が出てきた。計19冊登録されているようなのだが、「曾」と「曾」の違いで、別人28号の著者となっているのだ。これじゃあ、探しようがないわな。

閑話休題。『太郎物語』はたしかボクが高校1年の時の教科書に出てきたような気がします。陸上部に所属する主人公・山本太郎の、試合の日の朝を描いたものだったように記憶する。教科書に採録された部分はおもしろくなかったけれど、本を買って全編読んでみたらおもしろかった。これまでも何度も読んだ。いま読んでもじつに読みやすい。

太郎は恵まれた家庭育ちで、ボクとは全然違う世界に生きている。両親は知的で理解があり裕福だ。月に1万円まで、書店からツケで自由に本が買える(1万円だと思っていたら、今回読み直してみると、4千円だった)、大学に進学するときにはマンションを買ってもらえる、そんな太郎だけれど、なんとなくさわやかで、憎めないというか、あこがれるというか、引き込まれてしまいます。

先週の「ガッチリマンデー」というテレビに『月刊食堂』の編集長氏が出ていたので、そういえば、『太郎物語』の山本太郎もこの雑誌を買っていなかったっけ?と読んで読み返してみたら、『月刊社員食堂』という名の雑誌でした。ところが、『月刊食堂』は、1961年の創刊と言うことで、かなり歴史のある雑誌です。1973年初版の『太郎物語』に出てくる『月刊社員食堂』は、当時すでにあった『月刊食堂』をモデルにしているんじゃないかなと思う次第。

なお、この作品には「大学編」もあります。ブルジョア階級の話ですが(作者自身の住む世界なのでしょうけれど。実際、聖心女子大卒で、長年、上皇ご夫妻とも交流があるとのことですから)、大学生生活にあこがれを持つ本だと思います。

なお、「山本太郎」という政治家がいますが、何の関係もありません。フィクションです。

高校生の頃、曾野綾子はほかにも何冊か読みました。あの当時、曾野綾子なんて読んでる高校生なんかいたんでしょうか?『二十一歳の父』、『木枯らしの庭』、『砂糖菓子が壊れるとき』、『虚構の家』などを憶えています。後年、さまざまな社会的話題に関する発言が波紋を呼び、批判も浴びましたが、近年は「老い」をテーマとしたエッセイがまた人気を呼んでいるようです。

『太郎物語』、お勧めします。

～ ことばつれづれ ～

ぼうちゆうかん
忙中閑あり



忙しい中にも、ちょっと一息つける瞬間があるものだということ。朝日新聞1面の下の方に「折々のことば」という小さなコラム欄があります。4月9日版にこのことばが掲げられていました。

現在、鷺田清一氏が執筆していますが、かつてこのコーナーは、大岡信氏が「折々のうた」というタイトルで何十年も俳句や短歌を紹介し続けてきた名コーナーでした。それを新書にまとめたのが、岩波から出ています。30冊ほどにもなっています。

さて、みなさんにとっての「忙中閑」とは、どんな時?(このことばの意味がわからない人は、辞書を引いてみよう)

親しき仲にも

「親しき仲にも礼儀あり」ということわざがあります。どんなに親しい間柄でも、礼儀は守らなければならない。親しみが過ぎて礼を失すると、不和となりやすい。

「親しくないのに礼儀なし」はどうか。そんなことわざはないけれど、ただなれなれしい、ということになるうか。いきなりため口。たとえば、高齢者と見るや、幼児言葉で話しかけたり、だれでもかれでも年を取った人を「おじいちゃん」「おばあちゃん」と呼ぶのは失礼なのだそうです。

「親しき仲にも礼儀あり」。親しくない人には勿論、礼儀を持って接しなければなりません。先人はよき知恵を残してくれたと思います。

『新明解 故事ことわざ辞典 第二版』 三省堂 (壁側・辞書事典の棚)

三景さんのカレンダー

3年各クラスの授業に行くと、三景スタジオのカレンダーがつるされている。これがまた、なんとも味わい深いひとと言が書かれています。日替わりなので、いつも楽しみに見えています。

山本圭



俳優の山本圭さんが亡くなったと、4月25日の新聞は報じています。3月31日、81歳だったそうです。最近、こうしてしばらく日が経ってからの発表が、有名人、市井人ともに増えているように思います。

ボクの名前は、この山本圭さんから取ったのだと聞いたことがあります。父は当時の人のご多分に漏れず映画が好きで、自分の家、地域が大火で丸焼けになっていても気づかずに映画を見ていたという人ですが、銀幕の山本圭が気に入ったもんなんではなかねえ。当時、山本學、山本圭というのは美男兄弟俳優と言うことで人気があったらしい。ちなみにボクのすぐ年の近い従兄弟に「学」という名前がいました。

「圭」1字で止めておいてくれればよかった、そうすれば、田中圭や小室圭さんと同じ名前だったのに、と思うものの、「名字が3字で頭でっかちになるから、もう1本足した」というわけで、横線5本と縦線1本のなんともひねりも味気もない名前になってしまいました。まあ、名字が理解されづらいから、せめて名前は書きやすい、読みやすい名前にしようとしたらしい親心からのようですが。これはボクも自分の子どもたちの名前を付けるとき、同じことを考えました。

歯磨き粉とは

「歯磨き粉(はみがきこ)」といいますよね?なぜ「粉」が付くのか?それは、昔は「粉」だったからです。

ボクの子どもの頃の記憶では、家に「サンスター歯磨き粉」という、クレンザーみたいな粉が入った缶がありました。家族みんなの共用です。歯ブラシを水で濡らしてから、缶に歯ブラシを突っ込んで粉を付けるわけです。いやあ、今から思えばいくら家族とはいっても不衛生ですよ。こうして家族間で虫歯なんかがつっていったんでしょう。

そのうちチューブ入りの、練った歯磨き粉が登場する。これを「練り歯磨き」と言った。しばらくの間はアルミ製のチューブで、一押しするごとに指の跡が付く(押しした指の形にへこむ)ので、たいへん絞りづらいものでした。最後の方になると、むかしあった、電気洗濯機に付いていた洗濯物を絞るローラーにかませて絞るか、床に置いて足の親指でしごいたりしたものでした。そののち、チューブの材質は「ラミネートチューブ」という、いまのような絞りやすいものになったのです。そして、回さなくても一押しでキャップの外せるもの、立てられる形状のものなど便利で快適な「練り歯磨き粉」(昭和の言い方)が普及してきたわけです。



旅は人を育てる

前号5月号にも書きました。ネットの記事にこんなのがありました。

大阪から徒歩で四国を目指した青年。その旨を書いた旗を掲げながら歩き続けたそうです。神戸の山道で、空き家の軒下を借りて野宿した。あさ起きたら、そばにレジ袋に入ったおにぎりや飲みものが。中に「がんばってください」ともメモも入っていたという。きっと前日この青年の姿を目にし、コンビニで買ったものをわざわざ届けに来てくれたものらしい。なんと心温まる話でしょう。

ボクにもそんな学生時代の体験が2つあります。



一つは、青森駅で列車を降り、青函連絡船に乗り換える栈橋の階段を、和服姿のご婦人が、重い荷物を持ちながらやっとの様子で昇っている。ボクは肩掛けのスポーツバッグしかなかったから、お手伝いを申し出て、船まで荷物を運んでさし上げた。連絡船が出航してもまもなく、ご婦人はわざわざ船内をボクを探しまわり、缶ビール2本をお礼としてくださった。乗り物全般に酔わないボクでしたが、たまたま時化たためか飲みつけないビールのせい、その日は酔ってしまったのでした。

もう一つは、昔の千歳空港でのこと。吹雪で東京行きが欠航となってしまった。当時は空港内に泊まることはできず、そういうときは千歳市内の安宿の客引きが集まるものらしく、仕方がないから泊まることにした。いまでは考えられないかもしれないが、足止めを食った他人同士が「相部屋」で一泊したのでした。ボクはそういう経験がない学生でしたので、そんなものかと思いつつ、見ず知らずの人と相部屋で泊まることに。相手は三菱だか住友だか、聞いたことのある大手企業に勤める若いサラリーマンで、名刺をもらったのだが残念なことになってしまった。その人はボクのことを「学生さん、飲めよ」といっては缶ビールと柿の種をおごってくれ、「学生さん、読めよ」といっては、漫画雑誌を買ってくれたりした。そんなに飲める口ではなかったし、マンガというものはからきし苦手だったのだが、その若いサラリーマンは、「学生はビールが好き」「学生はマンガが好き」という鉄の方程式を信じておごってくれたのだと思うが、いやあ、いまではあり得ない話でしょ？

いずれも昭和50年代の終わり頃の話です。

ブルートレインとして人気の高かった寝台特急「北斗星」なんかはまだ走っていませんでしたが、およそ30年間の運行期間、ボクは一度も乗ることもないまま廃止になりました。他にもたいへんな失敗談などもあるのですが、ボクは学生時代の帰省・上京のたびに多く、陸路の長旅を選びました。夜行急行(寝台ではなく、普通のしかも向かい合わせボックス席の座席)と連絡線乗り継ぎ長旅です。学生時代の終わり頃には、できたての東北新幹線にも乗りましたが、当初は大宮発だったり、盛岡止まりだったりして、やたらと乗り継ぎが多かったので、やっぱり上野発の夜行列車、涙の連絡線、小樽経由の特急列車などを使うことが多く、これらはいまままで廃止されており、古き良き思い出です。そして、旅は多くの貴重な体験をさせてくれました。

若者よ、まだ見ぬ世界へ、日本へ、北海道へ!



『ピーター・フランクルの諸国漫遊記』 増進会出版社 (NDC 290の棚)

『ももこの世界あっちこっちめぐり』 さくらももこ 集英社 (NDC 290の棚)

『日本の絶景&秘境100』 朝日新聞出版 (NDC 290の棚)

動物園 (…これ、中国語での発音は難しかったなあ)

「動物園」は国語辞典でどう説明されるのか。ユニークな語釈で有名な三省堂の「新明解」で見てみよう。

「捕らえて来た動物を、人工的環境と規則的な給餌(キュージ)とにより野生から遊離し、動く標本として一般に見せる、啓蒙(ケイモウ)を兼ねた娯楽施設。」(新明解国語辞典第八版2020)

最新版も他の辞書に比べるとユニークだけれど、比較的穏当な語釈です。ところが版が古いものほどそれはおもしろい。平成元年版(新明解国語辞典第四版1989)を見てみよう。

「生態を公衆に見せ、かたわら保護を加えるためと称し、捕らえて来た多くの鳥獣・魚虫などに対し、狭い空間での生活を余儀無くし、飼い殺しにする、人間中心の施設。」

辞書編纂者の思想が垣間見られる語釈です。ちなみにこの後、第五版1997年から現在のような語釈に改訂されたようです。参考までに、他の国語辞典の語釈を紹介します。



「世界各地の動物を収集・飼育して広く一般に公開する施設。」

(明鏡国語辞典第三版2021)

「いろいろな動物を飼って多くの人に見せる／研究する所。」

(三省堂国語辞典第七版2014)

ね?辞書の引き比べて、おもしろいでしょう?「恋愛」の語釈も比べてみるとおもしろいよ。昔の辞書にはその相手が「異性」と書かれていたのが、いまはジェンダーフリーの観点からか性別を限定しない書き方になっています。昼休みや放課後、暇をもてあましたら、図書館で辞書の引き比べなど、いかがでしょう。

『新明解国語辞典 第八版』 三省堂

(壁側・辞書事典の棚)

『明鏡国語辞典 第三版』 大修館

(壁側・辞書事典の棚)

OJT

OJTって聞いたことあるでしょうか。On the Job Training 新人や未経験者に対し職場で、実務を通じて知識や技術などを身につけていく手法なんだそうです。

ところで近年、若者がメールや電話、パソコンが使えないという報告があるそうです。パソコンが使えないなどと言うのはちょっと昔のおじさん世代のことではないかと、耳を疑うような話ですが、今の若者はLINE中心だから、メールなんて使わない。固定電話のかけ方、受け方、マナーなど知るよしもない(これまたもっぱらLINE電話だったりするから、ダイヤルするところから知らないという)。パソコンも、WordやExcelに触れぬまま社会人になるのだという。

あれ?学校で習ったのでは?と思いきや、大学生になると、あらゆる連絡や手続き、レポートや卒論までスマホで完結させる世代は、WordやExcelという、職場で日常もっとも使うツールが使えないのだそうです。

たしかになあ。高校生だってそうなのかもしれないね。

だから、いまどきのOJTは電話のかけ方受け方、パソコンの基本ソフトの使い方からなんだそう。ところが、大きな企業ならいざ知らず、中小企業ではそんな余裕はないから、入社早々「使えない新人」扱いされ、あげく、2~3カ月で職場を去って行く若者も多いのだとか。

まったく、世の中の変り様は早いものであります。

ピリオドとコンマ

ピリオドとコンマの使い方が、国によって違うという話。最近読んだ本の中にありました。みなさん、ご存じだったでしょうか。「位取り」というのは、3桁ごとに付ける印で、たとえば日本では「1,000円」の位取りは「コンマ」で、小数点は「0.15%」などと「ピリオド」で表記しますね。

	イギリス式(日本も)	フランス式((ドイツ・イタリア・スペイン等))
位取り	コンマ	ピリオド
小数点	ピリオド	コンマ

へえ、知らなかったなあ。知らなかったけれど、これからも知らなくても済みそうだなあ。

『てんまる 日本語に革命をもたらした句読点』 山口謡司 PHP新書

眠れぬ夜

眠れない夜は、寝なければいい。そう考えると気は楽になります。眠れなかったら明日どうしようなんて、明日のことを思い煩わない方がよいのです。

記憶に残る「眠れぬ夜」が2度あります。いずれも、就職初年度のことでした。

1度は、日航ジャンボ機の墜落した夜です。一晩中テレビを消すことが出来ませんでした。たいへんな大惨事でした。これ以降も、世の中では多数の犠牲者が出る大きな事故や事件、テロなどが続きました。

もう1回は、強烈な痛みで襲われた一夜です。はじめは耳の下というか顎(あご)というか、そのうち頭部全体が形容しがたい猛烈な痛みで襲われて、悪い病気にかかったんじゃないかと不安に駆られ、何度も救急車を呼ぶことも真剣に考えたが、夜明け前にこんな住宅街で救急車を呼んだら迷惑だろう、夜が明けてからにしようと、悶絶しながら耐え抜きました。松山千春じゃないけれど、「長い夜」でした。翌朝町立病院に電話して痛みの様子を話して何科にいったらよいか相談したら、まずは歯医者に行ってみてはどうかということになり、そうしてみたところ、虫歯だったのでした。いまなら結構遅くまでドラッグストアが開いていて、痛み止めなどが買えて助かったらと思う次第。(あ、ホームナースという力強い味方がいるのを忘れていました。)

『あつかったらぬげばいい』 よしたけしんすけ 白泉社 (絵本の棚)

あつかったら ぬげばいい / おとなでいるのにつかれたら あしのうらをじめんからはなせばいい etc.

新聞切抜き拾い読み

ここに上げた記事は、図書館前掲示板に掲示中です！
館内には3紙の新聞があります。新聞を読む習慣を！



▼「『女性は無知』根強い偏見 吉野家不適切発言」 朝日新聞 4/22

牛井の吉野家の常務取締役が、若い女性にリピーターになってもらう戦略を「生娘をシャブ(薬物)漬けにする」ようにしていくという発言が話題になりました。

ふ〜ん、まだこんな人が日本には生き残っていたんだという驚きです。しかもまだ若い人のようで、早稲田大の特別講座に講師として招かれた場での発言だと言うことで、幾重にも驚きの発言でした。

今回の記事は、この案件に関して、作家・生活史研究家の阿古真理さんにインタビューした記事でした。

ボクは学生時代一度だけ友人に誘われて、吉野家の牛井を食べたことがあります。さしてうまいとは思いませんでした。先輩に誘われてピザというものを生まれて初めて喰ったときは、吐きました。体が受け付けなかったようです。マクドナルドに入ったことはあるが、ハンバーガーは食べたことがない。シェークというものを飲んでみただけでした。学生時代、どこそこのハンバーガーは犬やネコの肉を使っているとか、指が入っていたとか、まことしやかに噂されたものでした。あまりに安かったからなのかな。ワンワンバーガー、ニャンニャンバーガーとか言ってね。「口裂け女」の都市伝説みたいなものでしょう。元来、外食とかファストフードとか、あんまり好きではないんです。このおじさんは「シャブ漬け」にはできないことでしょう。長生きできるかもしれません。

▼「福知山線事故から17年」 朝日新聞 4/26

JR福知山線脱線事故から、4月25日で17年となったことが報じられていました。いまの高校生が生まれたか生まれていないかという年数がたちました。ああ、新年度が始まってまもなくの、こんな時期だったかなあ、と思います。テレビの事件事故映像で衝撃的だったものはいくつもありますが、この事故も忘れられません。カーブを脱線した列車が、マンションに激突し、107名もの死者を出しています。当時の事故後の報道によれば、JRとなってから、職員のミスに対する指導が厳しく、すこしの遅延も許されない職場風土となっていて、やや運行

が遅れていたその列車の運転士が遅れを取り戻そうと速度を上げたため、カーブで脱線したらしいと言うことでした。何秒遅れていたのかはわかりませんが、なんとも悲惨な事故でした。

520名もの犠牲者を出した日航機墜落事故(1985年8月)、軽井沢の大学生スキーバス転落事故(2016年1月)、阪神淡路大震災(1995年1月)、東日本大震災(2011年3月)、北海道南西沖地震(奥尻地震1993年7月)、豊浜トンネル崩落事故(1996年2月)、米国の同時多発テロによる貿易センタービル崩落(2001年9月)などなど、この数十年間、挙げれば切りがないほど、痛ましい事故や災害の記憶がよみがえります。

今回の知床観光船の事故も、沈没直前に奥さんに「いままでありがとう」と電話をした男性の話が伝わるなど、こうした大きな事故の陰には数え切れないほどの胸の痛む話が隠されています。

さらにはロシアのウクライナ侵攻の悲惨な映像。人類の叡智で、防げるものもあったのではないかと思う次第です。

▼「新年度公立で教員不足相次ぐ 長時間労働で教職敬遠か」 朝日新聞 5/7

思えば20代、30代、40代と、ずいぶんとただ働きをしたものである。

前にも書いたが、初任校では部活動の超勤、休日出勤が多かった。

2校目、3校目(30代、40代)は、退勤が8時9時なんてざらだった。晩ご飯を食べてまた学校に行くこともあったし、休日に学校へ行くこともあった。たまに朝、出勤するときに子どもから「お父さんまた来てね」なんて言われたことも。

50代になるとなんとなく仕事が早く片付くことが多くなったような気がします。いや、この学校に来て初めて国語専任になって、実技教科の持ち帰り仕事や教室・備品の清掃・管理、消耗品の管理などの仕事がなくなったかもしれません。あくせくすることがなくなったといひましょうか、こうして文章を読んだり書いたりする時間の余裕ができて幸せに思います。

ボクが若い頃、こう言った年配の先生がいました。「わたしは〇〇という教科が好きだ。その好きな教科を教えて一生の仕事にできて幸せだ」と。転勤するときだったか、退職するときだったかの挨拶だったと思います。いま、ボクもそんな気持ちになれたような気がします。

こういうことを、学校の先生がみな言えるようになったら、毎年全国で2500人以上もの「先生不足」も解消されていくんじゃないかと思うんだけど、好きな教科指導の仕事ばかりではないから、なかなかそうはならないだろうなあ。

▼「それは人災 皇居炎上」 北海道新聞《卓上四季》 5/25

知らなかったなあ。いや、どこかで聞いていたのかもしれない。東京や広島焼け野原の写真はよく目にしたが、皇居は戦災に遭わなかったと思込んでいたのかもしれない。そういえば、現在テレビに映る皇居内の建物はそんなに古そうではないね。

調べたところによると、太平洋戦争の末期、東京への空襲は100回以上もあったらしいが、一番被害が大きかったのは3月10日の死者10万人。単独の空襲の死者としては史上最多という。このとき飛来したB29爆撃機は約300機。

そして「卓上四季」によれば、同じく終戦の年の5月25日には、B29爆撃機が東京上空に500機も飛来。このとき、周辺の火災が皇居にも飛び火したものらしい。1棟を残して3万平方メートルの建物を焼いたという。しかも、34人の死者を出した。消火設備も不十分な上に宮内省、内務省、軍部の統率もとれていなかったため、多くの死者を出してしまったということです。

**** 図書購入リクエストを ****

そうだ! 図書館へ行こう!

(文責 伊丸岡圭一)